

シリーズ「パーキンソン病」③

パーキンソン病のリハビリテーション
運動療法について

国立病院機構和歌山病院

リハビリテーション科 橋本 栞

パーキンソン病に対する治療の1つに運動療法があり、これは動きにくい動作やバランスの練習をして動作を維持・改善するものです。パーキンソン病には、様々な症状が出現しますが、その中で運動療法の対象となる主な障害として、①「体

にリズムよく「1、2、1、2…」と号令をかけるリズム開始法を実施したり、床にテープを等間隔に張ってそれを跨ぐように歩く視覚誘導法を用いたりします。もしくみ足が出現してしまった時には、無理に歩こうとせず、一度完全に止まってから再度リズム開始法などを利用して歩き始めると、歩行を再開しやすくなります。

・関節がかたくなる(関節可動域制限)②「バランスが悪くなる(姿勢反射障害)③「歩きづらくなる(歩行障害)」の3つがあります。

また「小刻み歩行」によって、歩幅が少しずつ狭くなり前方へ体が傾き止まれなくなり(突進現象)。この場合は、腕の振りを大きくして歩くよう指導したり、大腿で歩く練習をしたり、鏡で自分の歩く姿を確認しながら歩くのも効果的とされています。

まず、関節可動域制限ですが、これは関節が動かせられた時に筋肉がこわ

そして歩行障害に対して一番重要なことは、適切な口頭指示をタイミングよく使い歩行介助を上